

『王の帰還』における結末と色彩表現

川原 有加

日本大学大学院総合社会情報研究科

The Relation between the Ending and the Color Descriptions in *The Return of the King*

KAWAHARA Yuka

Nihon University, Graduate School of Social and Cultural Studies

This paper is a study of color descriptions in *The Return of the King*, which is the third and last volume of a very long story, *The Lord of the Rings* written by J. R. R. Tolkien. In the third volume, we can see not only the climax of the struggle between good and evil, but also the consummation of throwing away a evil ring, the death of old lords, some marriages, the coronation of the king, Aragorn, etc. And the moving scene is that the main characters sail from the Grey Heavens, moreover the last scene is that Sam returns his home. In his essay 'On Fairy-Stories,' Tolkien insisted that all complete fairy-stories must have the Consolation of the Happy Ending. This view is certainly true of the end of *The Return of the King*.

Tolkien uses good and effective technique of color descriptions in *The Lord of the Rings*. The technique of color descriptions suggests the evolution of characters or events and functions as a key indicator to understand Tolkien's idea of a Christian as well as an artist.

序

『王の帰還』(*The Return of the King*, 1955) は、J. R. R. トルキーン¹ (John Ronald Reuel Tolkien, 1892-1973) の代表作『指輪物語』(*The Lord of the Rings*, 1954-1955)の三部作の一つで第3部にあたる。この長編を支えているのはトルキーンが芸術家として駆使する巧みな物語技法である。トルキーンがファンタジー論を展開した「妖精物語とは何か」('On Fairy-Stories,' 1947)において、彼は、完全な妖精物語にはすべて「幸せな結末の慰め」が必要である²と述べている。そこで、『指輪物語』の最終部になる『王の帰還』に焦点を当て、物語技法の一つである色彩表現との関わりから『指輪物語』における結末について検証していくことにする。

1. 『王の帰還』の特色

第1部『旅の仲間』(*The Fellowship of the Rings*, 1954)、第2部『二つの塔』(*The Two Towers*, 1955)に続く第3部『王の帰還』は、第5巻(Book V)、第6巻(Book VI)の二巻から成る。グループごとの物語が交互に描写されている点は『二つの塔』と類似しているが、途中で別れていた登場人物たちが一同に集い、再び一つの物語となる点は、『旅の仲間』とも異なる。

第5巻第1章から第3章の始まりの部分は1942年ごろ執筆したことをトルキーンは1966年の新版の冒頭で書いている³。この部分は指輪戦争に向かっている場面であり『指輪物語』全体でも比較的初期の執筆であることが推測できる。第一次世界大戦体験者のトルキーンが、第二次世界大戦の世の中を案じていたとも考えられる。一同が集うのは傷ついた

¹ 本論文では発音に従い、トルキーンと表記する。

² J. R. R. トールキン『妖精物語について—ファンタジーの世界』、猪熊葉子訳、評論社、2003年、137ページ。

³ J. R. R. トールキン『新版 指輪物語 9 王の帰還下』、瀬田貞二、田中明子訳、1992年、337ページ。

者が収容され、荒れ果てた街の中で唯一緑の庭が存在する療病院である。この場面は、争いや暗闇での旅などが多い『王の帰還』において登場人物だけでなく、読者にも安らぎと癒しを与える。

第6巻の前半は『指輪物語』の最も重要な場面である。『指輪物語』における長旅は、本来「邪悪な指輪を棄却する」という目的から始まる。途中〈旅の仲間〉が結成されるが、指輪の力の誘惑に負けた者が現れたことをきっかけに〈旅の仲間〉は離散する。その後、彼らは様々な敵と戦いながらそれぞれの旅を続けていく。所持した指輪を棄却するという主たる旅は、指輪所持者としての責務を担っていたフロド(Frodo)と彼に忠実に仕えるサム(Sam)によって守り続けられ、彼らは苦難の末滅びの山の火口へ到達する。長く厳しい指輪棄却の旅は、フロドとゴラム(Gollum)の行動に見られるように、これまでの物語展開から予想がつかない結末が待っているが、指輪を棄却するという目的は達成されることになる。

しかし、物語はここで終わるわけではなく、その後のことが第6巻後半に描かれている。『王の帰還』の題名の由来とも関連しているアラゴルン(Aragorn)の戴冠式、登場人物たちの結婚、フロドたちのホビット庄までの帰還、そしてシャーキー(Sharkey)に支配されたホビット庄を取り戻すための戦いが再び起こる。この戦いに勝利し、ホビット庄には平和が戻り、これまでの旅の記録がまとめられた後、フロドたちが灰色港から旅立つまで物語は続く。

『王の帰還』に見られる物語技法では、例えば、同時に進行している出来事が交互に描写されているため、劇的アイロニーや伏線が数多く見られる。また『王の帰還』でのアラゴルンの存在は一際目立つようになる。アラゴルンは仲間たちと戦い、勝利し、最後は王となるが、王位に就くまでには様々な引き立て役が存在する。さらに焼身自殺を遂げるデネソール(Denethor)の経緯、フロドとサムの指輪棄却の旅の結末、さらに支配されていたホビット庄の行く末などサスペンス的要素も多数盛り込まれている。

このように『王の帰還』では、『指輪物語』の主軸となる邪悪な指輪をめぐる出来事はもとより、様々な事が結末を迎える。そこで、以下では『王の帰還』、さらに『指輪物語』の特色を踏まえながら、『王の帰

還』における主要登場人物たちの行く末と物語全体の最終場面を、作品において多用され、効果的な役割を果たしている色彩表現の観点から精査していく。

2. 物語の結末に向けて

2.1 二人の老君主

『王の帰還』では、デネソールとセオデン(Theoden)の二人の老君主が最期を遂げるが、二人の最期は大きく異なる。

デネソールはボロミア(Boromir)とファラミア(Faramir)の父であり、ミナス・ティリスの執政として国を治めている。ガンダルフ(Gandalf)とホビットのピピン(Pippin)は、デネソールに面会することになるが、第5巻で彼らが登場する箇所においては‘white’の使用が多い。たとえば、デネソールの拠点である白い塔(the White Tower)を始めとして、その庭の木、石、ガンダルフたちに出された菓子、ファラミアが食するパンの色などがある。しかしこれらはデネソールが直接関わっているわけではなく、ガンダルフが登場する場面において使用されており、ガンダルフとの関連が深い色彩となっている。

白い塔の警護をしている家来たちの装いの色は‘black’と‘silver’である。‘black’は『指輪物語』ではサウロン(Sauron)やオーク(Orcs)など敵を表わす色であるが、‘silver’が加わることで敵との相違を表わしている。彼らの装いは戦いに向かうときと同じであり、デネソールのゴンドール軍を象徴する色彩となっている。デネソールはファラミアの安否が分からないとき、黒いマントの下には鎖かたびらを着込み、長剣を所持して自らも参戦の準備をしていたのである。長剣の鞘はミナス・ティリスの兵の制服と同じ‘black’と‘silver’であり、君主としての強い使命感と誇りが見られる。また、ゴンドールの紋章は黒地に城塞の庭に生える白い木と七つの星である。七つの星は「ヨハネの黙示録」第1章を連想させる。やがて指輪の存在とそれをめぐる戦争によりデネソールの人生は大きく変化していく。デネソールはボロミアの死を知り、絶望する。さらに戦局が激しくなっていく中、ファラミアも瀕死の重傷を負って白の塔に戻ってくる。デネソールに仕えていたピピンは、戦いが行なわれているペレンノ

ール野には光も届かず、野の茶色くわびしげな様子を感じ取る。またファラミアが出陣していく朝は「茶色っぽい薄明かりの朝」と表現されている。使用されている色彩‘brown’は戦争の激しさと空しさを暗示している。さらにファラミアの負傷の一報が届く前、ピピンは遠くに赤い閃光を見る。赤い閃光はオークの塔から発せられていた光と同じであり、何か不吉な出来事を予感させる。

負傷したファラミアを部屋で寝かすようにさせたデネソールは、一人で塔の頂の下の部屋に行く。その部屋の狭い窓からうす青い光が見える。この光はファラミアの傷の重さだけではなく、今後のファラミアの苦境を暗示している。その部屋から出てきたデネソールはファラミアより死の形相を帯びていたのである。ここではデネソールが何をしていたのかは具体的に書かれていないが、光の青白さやデネソールの顔色の悪さからも悪しき予感が漂っている。

そして、デネソールの様子に大きな変化が起こる。デネソールは寝ているファラミアを運び出すように命じ、白い塔から出て暗闇の中に歩いていったのである。垂れ込めた雲が、ちらちらと明滅するどんよりした赤い火に下から照らされている。赤い火は『二つの塔』第4巻で敵のオークが燃やしていた火の色として、また『王の帰還』第6巻での滅びの山へ向かうときにフロドとサムが目にする火の色として特筆され、『指輪物語』では悪と恐怖の象徴であり、この場面でも関連性が見られる。

焼身自殺を図ろうとするデネソールをガンダルフは説得するが、そのときデネソールは未来を見ることができパランティアの石を取り出す。

And as he held it up, it seemed to those that looked on that the globe began to glow with as inner flame, so that the lean face of the Lord was lit as with a red fire, and it seemed cut out of hard stone, sharp with black shadows, noble, proud, and terrible. (V, 129)⁴

⁴本論文において *The Lord of the Rings* (『指輪物語』) の引用は、下記の〔使用テキスト〕を用い、引用箇所は括弧内に巻数と引用ページ数を示す。
〔使用テキスト〕

I・II—*The Fellowship of the Ring*. 2nd ed. Boston:

珠の輝きは炎を連想させる‘red’で表わされ、デネソールの顔を赤い火が照らしているように映り、彼が焼身自殺を図るために白い塔を出たときに照らしていた赤い火を連想させる。デネソールの顔は、年老いた大候として堅い石を刻んで彫り出したように黒い影を帯びて強固で、気品に溢れ、誇り高く、勢いがあり、一見、理想的経験の原型の姿である。しかし、顔色は‘black’という敵を象徴する色彩を用いて影として描写されているため、悪しき出来事を連想させる。また「黒い影」とは、療病院で流行っていた癒されない病の名前であり、デネソールも「黒い影」に侵されたかのように引き返すことができない状態を暗示しているとも考えられる。

結局、デネソールはガンダルフの説得に応じることなく焼身自殺を遂げる。『指輪物語』における人物描写では詳細な色彩表現の例が見られるが、デネソールの登場場面や彼自身に関しては色彩表現が少ないと言える。それは、狂気の果てに自ら死を選んだデネソールに多彩で美しい色彩表現も醜悪な色彩表現も似つかわしくないということであろう。

ファラミアを助け出すことが出来たが、デネソールを助け出せることが出来なかったことでガンダルフは沈痛な思いであった。ガンダルフは城壁に登り、辺りを眺め渡す。その姿はまるで白い石に彫った彫像のようで、新しい日の光の中に立っていたのである。白い石に彫った彫像に例えられた姿は、パランティアの珠を取り出したときのデネソールの顔の黒い影と対照的であり、‘white’は未来に向かう新しい日の光の輝きとガンダルフの衣の輝きの両方を表わしている。さらに、ファラミアを療病院に運んだガンダルフとピピンが玄関を出ると、灰色の雨が降り出し、火の勢いを弱める。この雨の色‘grey’は、悪を根絶しようとしているかのようなのである。こうしてデネソールの事件が決着する。

Houghton Mifflin Company, 1982.

III・IV—*The Two Towers*. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin Company, 1982.

V・VI—*The Return of the King*. 2nd ed. Boston: Houghton Mifflin Company, 1982.

デネソールは焼身自殺という悲劇的な最期を遂げることになる。彼は、ファラミアより頼りにしていたボロミアの死を聞き、ジレンマが起こる。戦局が激しくなる中、セオデンに助けを求めたり、さらにファラミアの参戦を強いるものの、ファラミアは瀕死の重傷を負って戻って来る。ファラミアの死を確信し、戦争が続く変わり果てた世の中でデネソールは苦しみ、絶望してファラミアを道連れに焼身自殺を図る。デネソールの場合、未来を見ることが出来るパランティアの石によって肉体的・精神的・道徳的にサウロンの悪に蝕まれていき、悪を取り込み、誘惑に負けてしまったことはリーランド・ライケンが定義している人の共感をさそわない聖書的悲劇のパターン⁵に当てはまると言える。

対照的に、セオデンはアイゼンガルトの戦いで勝利した後、再び参戦していく。第5巻ではセオデンとデネソールの物語は交互に描写されているが、セオデンとデネソールが第5巻第3章において彼らが間接的に関わる箇所がある。デネソールからセオデンに救援を求めた赤い矢が届く場面である。ボロミアに似ている使者の様子は、色彩表現が詳細に施され、目の色‘grey’はボロミアと同じであり、兜の前に付いている小さな星の色‘silver’はゴンドール軍を象徴している。セオデンは事態の重大さを察し、デネソールからの矢を震えながら手にとる。矢の色‘red’はオークの旗印の目の色であり、『指輪物語』における‘red’は、不吉さを暗示している場合が多く見られ、赤い矢は戦いの象徴として戦争の激しさを暗示しているだけでなく、何か不吉な出来事を予感させる。実際、セオデンは戦死し、デネソールは自殺して予感的中する。

セオデンたちは翌日に出発するはずだったが、戦いが開始されたことを察し、出発を早める。セオデンと一緒に出陣することになったホビットのメリー(Merry)は、セオデンの姪エオウエン(Éowyn)から白い馬の紋章が付いている盾をもらう。白い馬の旗印は『王の帰還』で何度も描写されている。馬の色‘white’はガンダルフやエルフなどに使用されてい

る善の象徴となる色彩であり、戦いの勝利を予期するかのである。また、白い馬は七つの星同様「ヨハネの黙示録」を連想させる。

ペレンノール野での戦いを前に、敵の指揮官がセオデンの王旗を見て、部下を率いて向かって来る。

Then he was filled with a red wrath and shouted aloud, and displaying his standard, black serpent upon scarlet, he came against the white horse and the green with great press of men. (V, 114)

まず、王旗に向かって行く指揮官の怒りが‘red’で表わされ、本格的な戦いの開始を告げている。敵の旗印は緋色の地に黒の蛇が描かれている。‘scarlet’は『指輪物語』全体においてもほとんど使用されていない色彩であり、高貴の身分や聖職の象徴である一方、罪悪を表徴する色である。旗に描かれているのは黒い蛇(black serpent)であり、悪の象徴となっている。それに対してセオデンの王旗は白馬と緑野である。これは、馬の‘white’によりセオデンの高貴さを象徴しているだけでなく、緑野に白馬の描写は、緑豊かな自然の中にいる美しい白馬を連想させる。この旗印は、トルキーンの自然への愛情と反戦への思いが込められていると考えられる。

セオデンは敵に向かい、旗印の黒い蛇が地にまみれているのを見る。これは敵に勝ったことを意味しているが、直後、セオデンの周りに暗闇が立ち込め変化が起こる。突然、その黄金の盾の光がにぶり、黒い矢が雪の鬘を貫き、さらに黒いマントに真っ黒の矛を使っている敵ナズグル(Nazgûl)たちの首領が乗った怪鳥が現れる。セオデンの盾の色‘gold’の光のにぶさに加え、敵の旗印の蛇やナズグルたちの首領の様子など敵を表わす色彩として‘black’が多用されることでセオデンの行く末が暗示されている。やがてセオデンは力尽きる。

セオデン亡き後、甥のエオメル(Éomer)が指揮を執るようになり、彼は緑の小山に馬で駆けていく。

So he rode to a green hillock and there set his banner, and the White Horse ran rippling in the wind. (V, 122)

⁵ リーランド・ライケン『聖書と文学』、山形和美監訳、すぐ書房、1990年、132、147ページ。

エオメルは緑の小山にセオデンを象徴する白馬と緑の旗印を立てるが、旗紋が‘the White Horse’と大文字で表記されているところからセオデンに対する敬意と哀悼の意が込められていると考えられる。

セオデンの亡骸は療病院に運ばれる。

And the hangings of the bed were of green and white, but upon the king was laid the great cloth of gold up to his breast, The light of the torches shimmered in his white hair like sun in the spray of a fountain, but his face was fair and young, save that a peace lay on it beyond the reach of youth; and it seemed that he slept. (V, 137-138)

掛け布の緑と白は、白馬と緑野の王旗を連想させ、また亡骸に掛けられている大きな布の色は‘gold’であり、セオデンの偉大さと勇敢さを称えている。炬火の光はセオデンの白い髪に照り返り、セオデンの老いと死を象徴するかのようにかすかである。しかし、彼の顔は美しく若者のようであり、眠っているように穏やかだったのである。セオデンの力強さと戦いの終結に対する安堵の表れである。

このようにデネソールとセオデンの最期には大きな相違が見られる。デネソールは徐々に精神的に困惑した状態に追い込まれた結果、自ら命を絶つ選択をするのに対し、セオデンは勇敢に戦いながら最期を迎える。そして、彼らの最期への転機の場面において使用されている色彩表現は異なる。デネソールが関わる場面では‘black’や‘red’など悪の象徴となる色彩の使用が多く、‘white’は使用されてはいるがデネソールに直接関わる対象物への色彩として使用されていない。一方、セオデンの場合は‘white’、‘green’、‘gold’など善の象徴となる色彩が使用されている。色彩表現は、悲劇的最期を遂げたデネソールと英雄的最期を遂げたセオデンの対照的な結末を暗示し、表象していると言える。

2.2 指輪の棄却

サムは、オークたちに監禁されているフロドを助け出し、オークの装いをして脱出することを思いつ

く。脱出は成功し、二人はオークの目を逃れながらしばらく旅を続ける。しかし、滅びの山が近づくにつれ、フロドの肉体的・精神的疲労はさらに増し、小さな指輪でも持っていることに苦痛を感じるようになる。サムは身につけているものを置いていくことを提案する。二人はオークの盾、冑を投げ捨て、むし取られたぼろぼろのマントはばらばらになって散らばる。マントの色‘black’は、『指輪物語』における敵を象徴する色彩である。フロドは‘I’ll be an orc no more’ (VI, 214)、そして‘I’ll bear no weapon, fair or foul. Let them take me, if they will!’ (VI, 214) と叫ぶ。これは、オークからの解放とフロドの自己主張の現れであり、武器など戦いに関わるものを持たないことで反戦的な意味も込められている。

フロドとサムは、これまでのようにオークの旗印の赤い目を連想させる赤い光に恐怖感を抱きながら進んでいく。そのとき、サムは岩山から何かが落ちて来るのを見る。それは一個の黒い小さな石のようなもので、ゴラムであることが分かる。ゴラムの姿は敵を象徴する‘black’で描写されているが、これまでと、さらにその後の彼の行動を暗示している。フロドとサムは滅びの山に無事到着する。サムは滅びの山の火口でぎらぎらする光の中に浮き出たフロドの姿を目にする。フロドは滅びの山の火口まで進み、指輪を火口に投げ捨てようとするが、結局、指輪の力に負け、投げ捨てることができないのである。この物語展開について次のような考察がある。

この場面は作中でもっとも驚くべきかつ期待はずれの瞬間である。……彼はまさに最後の瞬間に失敗する。……トルキンが勇者にふさわしい伝統的な結末に対する全読者の期待を欺くからである。とはいえ、彼はもっと重要なこと、すなわち、根源的善と根源的悪の並置を達成する⁶。

フロドは疲労困憊の中、滅びの山の火口を目指し

⁶ ラルフ C. ウッド『トルキンによる福音書』、竹野一雄訳、日本キリスト教団出版局、2006年、118ページ。

て前進していく。途中でオークの装いを捨て、自分がオークでないことを主張する。その場面ではオークのぼろぼろのマントの‘black’のみ色彩表現がなされ、フロドが悪の象徴であるオークのマントを脱ぎ捨てたことを強調し、邪悪な指輪の棄却に向かうという悪から善への行動を提示している。しかし、火口の前でフロドがとった行動は読者の驚くべき予想外のものであり、悪から善への変化ではなく、悪と善の並置という展開となったのである。

フロドの行動について、トルキーンは手紙で次のように書いている。

……しかし、プロットの論理に従えば、フロドの失敗は、出来事として、明らかに必然でした。それにフロドの失敗は主人公が不屈で終わるたんなる〈妖精物語〉よりもずっと意義深く真の出来事であるのは確かでしょうか。善人はもとより、聖者すらも、彼ら自体で打ち勝つにはあまりにも強大な悪の力に屈することはあり得るのです。この場合、(〈主人公〉でなく)大義が勝利をおさめたのです。憐れみと慈愛の行使、それに損傷の赦しのゆえに、すべてが正され、大惨事を避ける状況が生じたのです⁷。

滅びの山でのフロドの行動は、誰でもが屈する可能性がある悪の力の巨大さを明らかにし、トルキーンにとって英雄の不屈性が表徴された結末よりも重大であり、『指輪物語』の主軸の展開に直結している。

指輪の棄却についてはこれで終わるわけではない。フロドは追いかけてきたゴラムと指輪を争奪することになり、ゴラムはフロドの指を噛み切って指輪を奪う。だが、ゴラムは平衡を失い、火口に落ちていく。フロドが行う数度の意志決定はいずれも死に結び付き、滅びの山の亀裂の前でフロドは指輪の廃棄をためらうが、これが身代わりとしてのゴクリの死をもたらすことになる⁸のである。その直後、空に雷鳴が轟き、稲妻が天をころがし、振り下ろされる鞭

のように黒い雨が滝つ瀬となっている。正気に戻ったフロドがサムに終わりを告げる。雨の色‘black’は敵を連想し、雨が降ることで敵や指輪の邪悪な力などの悪が敗れて去り、重荷が取り去られ、平和が訪れたことを表わしているのである。

2.3 登場人物たちの結婚

『王の帰還』の特色の一つは登場人物たちの結婚の描写が見られることである。

エオウィンが男性同様に参戦することを望むが、女性であるがために参戦を許されない。しかし、彼女は諦めきれず、男性に扮して参戦する。困難を克服して最後までやり遂げようとする芯の強さと勇氣は、物語に活力と与えていると言える。

メリーは、暗闇が晴れたとき、敵のそばにエオウィンが立っているのを見る。

But the helm of her secrecy had fallen from her, and her bright hair, released from its bounds, gleamed with pale gold upon her shoulder. Her eyes grey as the sea were hard and fell, and yet tears were on her cheek. (V, 116)

男性に扮していたエオウィンの正体が明らかとなる。兜の下に隠れていた髪の色は‘gold’で、輝きも加わる。さらに、目の色は‘grey’で、厳しさが感じられる。これはアラゴルンなどを始め『指輪物語』の登場人物にはよく見られる目の様子である。

その後、エオウィンは負傷する。エオメルは他に討ち死にした者を確認しているとき、死人のように顔色が白くなっているエオウィンを発見する。これは、彼女が全力で戦った姿と負傷の大きさの表れである。エオウィンの顔色‘white’は、この後彼女が静養する療病院の場面で何度も描写される。

療病院ではアラゴルンがエオウィンのもとに来て、彼女を初めて見た時の印象をエオメルに語る。彼女は白い花が真っ直に誇り高く、百合のように姿よく立っているが、その花が鋼から作られたかのように堅く、霜に侵されているようであった。エオウィンの姿を例えている花の色に‘white’が用いられ、彼女の誇り高さを暗示した善き象徴となっている。し

⁷ Humphre Carpenter ed., *The Letters of J. R. R. Tolkien*. London: HarperCollins Publishers, 2006, pp.252-253.

⁸ 本多英明『トールキンと C. S. ルイス』、笠間書院、2006年、70 ページ（新版）。

かし、その花は堅く、冷たそうな否定的な印象を抱き、再度、彼女の顔を見ても同じ印象を受ける。この場面でもエオウィンの顔色を百合の花の白さとして表現している。アラゴルンが彼女に呼び掛けると、体は動かないが、麻の掛け布の下で彼女の胸が上下したことが分かる。麻の掛け布の色も‘white’である。エオウィンに関する色彩表現は‘white’が主であり、男性に扮した力強さではなく彼女の女性としての純粋さと美しさを象徴している。

エオウィンは療病院の庭を散歩しているファラミアと対面する。その翌日の朝、ファラミアはエオウィンが城壁にたたずんでいるのを見る。

... she was clad all in white and gleamed in the sun.
... and they walked on the grass or sat under a green tree together, now in silence, now in speech.(VI, 239)

陽光に美しくきらめくエオウィンの衣は‘white’であり、彼女を象徴する色彩として強固なものとなっている。さらに二人で緑の木陰で腰を下ろして過ごしている様子は穏やかさを印象づける。次第に二人は惹かれていく。二人の眼前の土地の色は曖昧的な特色を持つ‘grey’で描写されている。見通しが立たない先行きの不安を暗示し、さらにエオウィンの初恋の相手であるアラゴルンが最後の戦いに出陣していく悲しみをも表わしている。そのときファラミアは母のマントをエオウィンに羽織らせる。そのマントは夏の夜の色をした大きな青いマントで、衿もとには銀の星がちりばめられている。‘blue’は夏の夜の色のように、鮮やかな印象を受ける。さらに大きなマントであることから包容力が備わっているかのようである。マントに施されている銀の星は、『王の帰還』では何度も描写されている善き事物の象徴である。ファラミアは母のマントを羽織らせることによって、エオウィンに母の面影を見ているのである。マントの色‘blue’はシャルトル大聖堂のステンドグラスの色であったことから聖母と結び付き、マリア信仰の隆盛とあいまって、12世紀から近世にかけてマリアが身にまとうものの色⁹として

定着したこともあり、エオウィンに聖母マリアのイメージを重ね合わせているようにも考えられる。ファラミアはエオウィンのことをローハンの白い姫(White Lady of Rohan)と呼ぶようになる。そして、エオウィンはファラミアとの結婚を決意する。ファラミアを受け入れたエオウィンには、幸せな大詰めを可能にする超越的な反応や、神による希望の実現の意味が含まれ、エオウィンの回復、すなわち本来の自分自身への回帰は、国土が再びすこやかになる姿と重なっている¹⁰のである。

また、アラゴルンの英雄的な姿は『王の帰還』においてこれまで以上に強調されている。死者の道に進む前の姿は黒っぽい灰色のマントに身を包み、宝石や金のきらめきや紋章などもつけておらず、唯一銀のブローチで留めているだけである。マントの‘grey’、ブローチの‘silver’はエルフのものと同じであり、善の印象が強いが、アラゴルンの顔は厳しく、土気色で疲労感がにじみ出ているのである。これまでの旅の疲労と、これからへの不安感が募っている。しかし、アラゴルンの統率力と機知に富む行動により指輪戦争は無事勝利を収める。

その後アラゴルンは療病院にて傷ついた人々を癒すが、イエス・キリストが多くの人々を癒した場面を連想する。人々は緑の石を持っていたことからアラゴルンを「エルフの石」と名付ける。パランティアの石によって悪に侵され、悲劇的な最期を遂げたデネソールとは対照的にアラゴルンの石は自然と生命の象徴である‘green’であり、エルフが持つ命の永遠性をも象徴している。『王の帰還』の「王」とはアラゴルンを指し、彼の重要度は『旅の仲間』、『二つの塔』以上である。アラゴルンは皆を導き、戦いに勝利し、英雄となり、傷ついた人々を救い、王の地位に就く。トルキーンの「幸せな結末の慰め」は、あらゆる闇と絶望の果てに、尽きぬ希望の泉が存在

隆志、伊藤誠宏『色彩の魔力—文化史・美学・心理学的アプローチ』、明石書房、2005年、75-76ページ。

¹⁰ ジョン・J・ダベンポート「ハッピーエンドと宗教的希望」、グレゴリー・バッシュム、エリック・ブロンソン編『指輪物語をめぐる16の哲学』、金田とおる訳、ランダムハウス講談社、2006年、340-341ページ。

⁹ 柏木治「青のヨーロッパ—その軌跡を追って」、浜本

するという終末論の予兆あるいは残響であって、神による裁き、そして新しい王国の到来を言外に述べている¹¹のである。アラゴルンの王位就任はトルキーンの理想的な物語展開であると考えられる。

『指輪物語』の第3部ではサタンのような冥王とキリストのような真の王アラゴルンの間での戦いを通して善と悪の闘争のクライマックスが見られる。アラゴルンは、責務を果たすために人々のところに‘帰還’する。第5巻では‘王であること’が強調され、第6巻では‘帰還すること’が強調され、この第3部は『王の帰還』という題が付されている¹²。

アラゴルンの戴冠式が行われるミナス・ティリスの広場には大勢の人が集まる。

A hush fell upon all as out from the host stepped the Dúnedain in silver and grey; and before them came walking slow the Lord Aragorn. He was clad in black mail girt with silver, and he wore a long mantle of pure white clasped at the throat with a great jewel of green that shone from afar; but his head was bare save for a star upon his forehead bound by a slender fillet of silver. With him were Éomer of Rohan, and the Prince Imrahil, Gandalf robed all in white, and four small figures that many men marvelled to see. (VI, 244)

軍勢の中の一人ドゥネダインの姿は、銀の帯で巻いた銀色と灰色の制服を着ている。また、額にも星がついた銀のバンドをしており、ミナス・ティリスを象徴する‘silver’が多用されている。アラゴルンのマントの色‘white’は、直後に描写されているガンダルフと同じである。しかし、衣の色が描写され

ているのは、ガンダルフのみであり、特別な意味を持っていると考えられる。さらにこの場面以降、‘white’が特に多用されている。例えば、ガンダルフの杖、街路の大理石、塔、花など、さらにアラゴルンの頭にかぶせられた王冠や白い花の葉の色には‘silver’も使用されている。これらはアラゴルンに関わるものを示している。これまでの‘white’は、エルフのガラドリエル(Galadriel)の衣の色や、再び登場したガンダルフの衣の色など、神聖さを象徴しているものであり、これらは、アラゴルンがガラドリエルやガンダルフと同様、王として神聖たる座に就いたことを示している。さらにマントについている緑の宝石は、エルフの国ロスロリアンでもらったマントに着いていたブローチの色、人々を癒したときに用いた石の色であり、神聖さを強固にしている。そして、夏至の前夜にたくさんの人々が到着する。

Upon the very Eve of Midsummer, when the sky was blue as sapphire and white stars opened in the East, but the West was still golden, and the air was cool and fragrant, the riders came down the North-way the gates of Minas Tirith. ... and after them came the Lady Galadriel and Celeborn, Lord of Lothlórien, riding upon white steeds and with them many fair folk of their land, grey-cloaked with white gems in their hair; and last came Master Elrond, mighty among Elves and Men, bearing the sceptre of Annúminas, and beside him upon a grey palfrey rode Arwen his daughter, Evenstar of her people. (VI, 250-251)

一団が色彩豊かに描写され、空の色‘blue’に加え、東の空に輝く星の色‘white’、西の空の色‘gold’と夜空の情景も詳細な色彩表現がなされている。そして、ミナス・ティリスの象徴的色彩である銀色の旗が見られる。また、ガラドリエルとロスロリアンの王ケレボルン(Celeborn)は、灰色のマントを着ている。エルフは敵の目を欺く役割を果たすためにマントの色として‘grey’を使用している。マントはフロドたち旅人に贈られ、灰色のマントはエルフとフロドたちを表象するものとなる。さらに、灰色の馬

¹¹ ジョン・J・ダベンポート、「ハッピーエンドと宗教的希望」、329 ページ。

¹² Jane Chance, ‘The Lord of the Rings: Tolkien’s Epic’, Rose A. Zimbaro and Neil D. Isaacs ed., *Understanding The Lord of the Rings: A Reader’s Companion*. London; HarperCollins Publishers, 2005, p. 222.

に乗ったエルロンド (Elrond) の娘アルウェン (Arwen) が現れる。アルウェンはアラゴルンと結婚する人物である。彼女の登場前のこの場面には色彩表現が多く、‘white’ や ‘grey’ などは、アルウェンの高貴さを暗示している。

サムはホビット庄に戻り、ふとガラドリエルからもらった贈り物のことを思い出す。開けてみると細かな灰色の粉末と銀色の殻を持った木の実のような一粒の種子であった。粉末の ‘grey’、種子の ‘silver’ はこれまでの物語からすると何か善きものをもたらす予感がするが、案の定、銀色の木の実を植えるとすくすくと大きくなり、銀色の木肌と長い葉をつけ、金色の花が咲いたのである。さらにこの年、ホビット庄では良いこと、不思議なことが次々に起こる。たとえば、めったに見られなかった豊かな金髪の持ち主が現れる。これも金の花から予測できる色彩である。色々な出来事が起こるが色彩表現が行われているのはこの髪の毛の色だけであり、人物の色彩描写へのこだわりが現れていることが良く分かる。

3. 帰還

ホビットたちはホビット庄に帰還することになる。

まず、アルウェンはフロドが傷と疲労が癒えるように西に行くこと、さらに時期が来た時、港から旅立つことを勧める。これは灰色港の場面の伏線である。また、アルウェンは、別れ際に贈り物として頸にかけていた宝石をとってフロドの頸にかける。それは、銀の鎖の星のような白い宝石がついたものである。鎖の ‘silver’ と宝石の ‘white’ はアラゴルンの冠に使用されているなど『王の帰還』において神聖さを表わす色彩である。この後フロドは頻繁にこれを触るようになり、フロドの心を落ち着かせる働きをする。

帰路ではこれまで旅をしてきた場所に再び立ち寄り、以前に会った人々と再会する。

ケレボルンとガラドリエルがアラゴルンと別れて振り返ると、沈んでいく夕日がアラゴルンを照らしている光景を目にする。

...and the falling Sun shone upon them and made all their harness to gleam like red gold, and the

white mantle of Aragorn was turned to a flame. Then Aragorn took the green stone and held it up, and there came a green fire from his hand. (VI, 260)

アラゴルンを照らす夕日は赤く黄金のように輝き、夕日はアラゴルンと結婚するアルウェンを象徴するものであり、力強さを感じる。アラゴルンのマントは、ガンダルフと同様 ‘white’ である。さらに、アラゴルンを象徴していた緑の石は燃えてしまうことにより、役目を終えたことを示唆している。

また、一行は杖にすぎた老人に出会う。その老人はサルマン (Saruman) であったが、彼がまっとうしているのは灰色の、それも白が汚れたようなぼろである。賢人団にいたときのサルマンは ‘white’ のマントを着ていたが、悪に屈し、ガンダルフから賢人団を追放される。彼の装いの色は ‘white’ ではなく、‘grey’ である。しかし、この ‘grey’ は灰色のガンダルフ (Gandalf the Grey) と呼ばれていたガンダルフのような善の象徴ではなく、悪の象徴の色彩である ‘black’ が混入している色である。

裂け谷ではエルロンドやフロドの父であり養父のビルボ (Bilbo) と再会し、しばらく滞在するが、やがて出発するときを迎える。そのとき、エルロンドは良い旅路を祈り、フロドにだけに次のように言う。

‘I think, Frodo, that maybe you will not need to come back, unless you come very soon. For about this time of the year, when the leaves are gold before they fall, look for Bilbo in the woods of the Shire. I shall be with him.’ (VI, 267)

この言葉からフロドが裂け谷の館の再訪はないこと、ビルボとエルロンドがホビット庄の森に現れることを示している。この場面も灰色港の場面を予期していると言えるが、その日は具体的には述べられていない。しかし、木々の葉が落葉前に金色に色づくころということで、秋の日であることが推測できる。また、木々の葉の金色は高貴さを象徴しており、この場面以降の描写に ‘gold’ が頻出する。

裂け谷を去り、痛みと不安感に襲われていたフロドは再び快活になり、その後の旅も、美しい林に足

を止めながら順調に進んでいく。秋の陽光が当たった葉は赤く黄色く輝き、フロドだけでなく読者の心をも和ませ、活力を与える美しい光景である。ここでの葉の色‘red’は自然の陽光によるものであり、これまで恐怖感を抱かせていた敵のオークの目の旗印の‘red’とは異なる。

ホビットたちはマントの下に身につけている鎧などを場違いに感じるようになる。ガンダルフの姿も全身を白に包み、青と銀色の大きなマントを羽織った姿は以前のガンダルフの姿と同じであり、戦いが終わり、平和なときが訪れたことを示唆している。

4. 物語の結末

『王の帰還』だけでなく、『指輪物語』全体のクライマックスとなるのが灰色港の場面である。主たる登場人物が灰色港から出航していく。灰色港の名が最初に現れるのは、『旅の仲間』第1巻第2章の‘The ancient East-West Road ran through the Shire to its end at the Grey Heavens, ... (I, 52)’である。港の名前に使用されている‘grey’は、『指輪物語』における第四回目の使用箇所になる。その前三回の使用は『旅の仲間』第1巻第1章に見られるが、善い印象を与えているガンダルフに関して用いられ、この箇所での使用も同様の印象をもたらす。また、街道の終着地である灰色港の方角になる西は『指輪物語』において善い方角であり、この時からトルキーンは灰色港が物語の終着点と決めていたのかもしれない。

袋小路屋敷に戻ったフロドは病気がちになり、心身ともに衰弱していく。そんなときアルウェンからもらった鎖についている白い宝石を触ることで、心を落ち着かせている。フロドが宝石を触る回数が増えていることで‘white’は何度も使用されている。これは、フロドの精神状態の悪化を意味し、美しさの象徴から死の象徴へと次第に変化していると考えられる‘white’の用例である。そして、フロドはこの世界を去ることを決意する。フロドは自分が登場する場面を終わらせることによって最も高潔な役割を果たすことになる¹³のである。

フロドとサムは出発することになる。日付は9月21日と明確に書かれており、エルロンドが予告していた初秋の時期である。そのことはその日の朝の光景の‘gold’からも結び付けることができる。その美しさは明るい未来が広がる印象を受ける。フロドとサムは、目の前にエルロンドとガラドリエルたちの一行がやってくるのに気付く。

Elrond wore a mantle of grey and had a star upon his forehead, and a silver harp was in his hand, and upon his finger was a ring of gold with a great blue stone, Vilya, mightiest of the Three. But Galadriel sat upon a white palfrey and was robed all in glimmering white, like clouds about the Moon; for she herself seemed to shine with a soft light. On her finger was Nenya, the ring wrought of mithril, that bore a single white stone flickering like a frosty star. (VI, 308)

この場面では、フロドたちホビットが「最後の憩」館でエルロンドに、ロスロリアンでガラドリエルに初めて出会ったときのように色彩表現が巧みである。エルロンドのマントの色である‘grey’はガンダルフのマントやエルフのマントの色としてこれまでも頻繁に描写されており、物語では善の象徴となっている。また、エルロンドは銀の堅琴を持ち、大きな青い石のついた金の指輪をはめている。また、ガラドリエルの描写には彼女の登場場面において多用されている‘white’がこの場面でも見られる。‘white’を連続的に使用することにより、永続的な彼女の純粋さを強調している。さらに、ガラドリエルの長衣のかすかな光は、彼女自身が放っているようなやわらかい光のように輝いている。また、彼女の指にはめられている指輪には、ちかちかと光を明滅する白い石がついており、エルロンドがはめている指輪の力強さと対比されることで、ガラドリエルに関する光は優しい光になっている。この場面での‘white’は、ガラドリエルに関わる事物の色彩を表わすだけでなく、光の明るさをも表わしている。また、光を

¹³ カート・ブルーナー、ジム・ウェア『「ロード・オブ・ザ・リング」聖なる旅の黙示録』、鈴木彩織訳、

表わす語は ‘glimmer’、‘soft light’、‘flicker’ とすべて異なり、微妙な光の様子を的確に表現している。

エルロンドとガラドリエル、フロドとサムとビルボは長い入江にある灰色港に到着する。

... and there was a white ship lying , and upon the quay beside a great grey horse stood a figure robed all in white awaiting them. As he turned and came towards them Frodo saw that Gandalf now wore openly it was on his hand the Third Ring, Narya the Great, and the stone upon it was red as fire.(VI,310)

この場面でも ‘white’ や ‘grey’ など高貴で善き印象をもたらす色彩が使用されている。一行を待つて立っている人の名前は表記されていないが、馬の ‘grey’ と全身の長衣の色 ‘white’ からガンダルフを連想するのは容易である。

そしてフロドたちはサム、メリー、ピピンに見送られて灰色港を出航する。

... and slowly the ship slipped away down the long grey firth; and the light of the glass of Galadriel that Frodo bore glimmered and was lost. And the ship went out into the High Sea and passed on into the West, until at last on a night of rain Frodo smelled a sweet fragrance on the air and heard the sound of singing that came over the water. And then it seemed to him that as in his dream in the house of Bombadil, the grey rain-curtain turned all to silver glass and was rolled back, and he beheld white shores and beyond them a far green country under a swift sunrise.(VI, 310)

‘grey’ は『指輪物語』において最も重要な色彩であり、物語の最後を締めくくりに最も適した使用であると言える。船は進み、入江から遠ざかる。その入江は ‘grey’ で表現されており、物語が繰り広げられていた中つ国の世界との決別を意味している。ある夜、フロドは雨の帳の変化を目にする。それは、‘grey’、‘silver’、‘white’、‘green’ の四色の色彩の変化で表わされている。トム・ボンバディル

の家で見たような夢の中での灰色の雨の帳は、銀色のガラスのように変化し、白い岸边、さらにその先にある緑の地をフロドは見る。‘green’ は『指輪物語』の中でも山や森や林など木々に関する色彩として多用されている。この場面でははるかに続いている緑の土地を表わし、これまで同様の自然に関わる色彩の使用である。これは、当時加速していた自然破壊に対するトルキーンの嫌悪感を暗示しながら、緑の土地の永遠性を表わしている。目の前の光景は自然をこよなく愛し、二つの世界大戦の体験者として戦後の平和を望んでいたトルキーンの理想の光景であると言える。この光景は昇ろうとしている朝日の下に広がっており、新しい日の訪れと共に理想の世界の始まりを告げている。

他方、この場面は単に対象物の詳細な色彩描写だけではない。たとえば、ガラドリエルの玻璃瓶は『二つの塔』第4巻第10章や『王の帰還』第6巻第1章において蜘蛛女シェロブ (Shelob) やオークと戦うために使用され、その光によってフロドたちは勝利出来たのである。その光が次第に弱くなり、見えなくなる様子は、灰色港からの旅立ちと中つ国の世界との別離を示唆している。また、かんばしい香りを感じる嗅覚、歌声が聞こえてくる聴覚の描写の後、色彩表現を含む視覚的描写へと続く。フロドは眼前の光景とその変化を体全体でとらえているのである。

このようにこれまで登場してきた主要登場人物たちが灰色港より出航していく。しかし、彼らの行き先は書かれておらず、この先彼らはどこに行き、どうなるかは最終的に読者の想像にゆだねられている。

しかし、灰色港の場面が『指輪物語』の最終場面ではなく、フロドたちを見送ったサムが妻や子どもが待つ家に帰宅する描写で締めくくられている。

And he went on, and there was yellow light, and fire within; and the evening meal was ready, and he was expected. (VI, 311)

家の明かりを表わす色彩 ‘yellow’ が『指輪物語』の最後の色彩表現である。家の中の黄色い明かりは暖かさを連想させ、灰色港での別れの悲しみを慰めるかのように何かほっとした印象をもたらし、幸せ

な結末となっていると言える。さらに物語の最後を締めくくる登場人物が『指輪物語』の邪悪な力に屈することなく、幾度の危機を乗り越えてきたホビットのサムであることは、この物語におけるサムの役割の重要性を示唆しているが、最後に使用されている色彩がホビットの普段の衣服の色であり、ホビットの好きな色‘yellow’であることはトルキーンにとって必然的な色彩選択だったのではないだろうか。

結論

このように『王の帰還』の色彩表現は、物語背景や物語展開の様々なパターンを踏まえながら、登場人物の行く末を暗示するという働きにおいて最も効果を発揮している。

『王の帰還』の特色として戦いの場面が多いことが挙げられるが、その場面での色彩表現は少ない。それはトルキーンが戦争の残虐さや悲惨さを色彩によって形容することなく、直接的にありのままを描写することに重点を置いているからではないかと考えられる。その戦いに翻弄されたデネソールとセオデンの老君主は、対照的な最期を迎える。それを暗示するかのように彼らの登場場面に使用されている色彩に違いが見られる。両方の場面とも‘white’が使用されているが、デネソールの場合は彼に直接関わる使用はほとんどない。セオデンの場合には野を連想させる‘green’や高貴さの象徴である‘gold’などの使用も見られる。指輪の棄却の場面では、これまで使用されてきた悪を象徴する色彩として‘red’や‘black’が効果的に使用されることで、恐怖感と疲労困憊の中で指輪棄却の旅を続けるフロドたちの心情を克明に表わしている。滅びの山の火口においてフロドの予想外の行動により善と悪の並置が浮き彫りとなり、さらに予想外の結末によって最終的には悪への勝利が明確になっている。また、アラゴルンとアルウェンは結婚し、ファラミアとエオウィンも結婚する。王位に就くことになるアラゴルンは、存在感や活躍など英雄的要素が『王の帰還』では際立っている。彼に関する色彩表現にもガンダルフやエルフなどに使用されている‘white’の使用が増え、王としての気品と偉大さを象徴している。またアルウェンやエオウィンに関する色彩表現にも

‘white’が用いられ、純粋で高貴な印象をもたらしている。旗印にもなっている白い木と七つの星や白馬、悪の象徴としての‘red’は、「ヨハネの黙示録」を連想させ、『指輪物語』の最終巻である『王の帰還』との関連性がより深いと言える。

『王の帰還』では、長旅のきっかけとなった「邪悪な指輪の棄却」の目的が達成された後、フロドたちが旅の出発地点であるホビット庄まで帰還する過程も詳細に描写されている。この場面の色彩表現はさほど多くなく、プラス・イメージの色彩表現も少ない。さらにホビット庄での戦いの場面でも前半同様に色彩表現は極少である。しかし、物語のクライマックスとなる灰色港の場面は、トルキーンの色彩美が最もよく表われている箇所である。使用されている色彩は、‘grey’、‘white’、‘silver’、‘green’、‘gold’、‘blue’などであり、色彩表現が細やかに施されている。使用されている色彩はどれも『指輪物語』全体を通して善き象徴となっている場合が多い。一方、この場面で使用されていない色彩として‘black’や‘red’がある。これらは悪の象徴として使用されていることが多い色彩であり、物語の結末の場面には適さないからであると考えられる。主要登場人物たちが灰色港より旅立つという物悲しさを醸し出しながら詳細で的確な美しい背景が描き出され、さらに最終的色彩表現がホビットのサムの妻と子どもが待つ家の明かりであることにより、読者は「幸せな結末」を十分に感じ取ることができるのである。

『王の帰還』における色彩表現は、物語の各場面によって色彩表現の有無が明確であり、登場人物の状態や行く末を巧みに効果的に暗示し、‘white’や‘silver’の使用が目立ち、高貴さが象徴されている場面が多いと言える。そしてこの物語は、色彩美豊かであるが物悲しさ漂う灰色港の場面、そして暖かい家への帰還という「幸せな結末の慰め」で結ばれている。『王の帰還』の「王」とはアラゴルンを指すのはもちろんのことであるが、最後の場面に注目すれば、困難に遭遇しながらも悪に屈することなくすべての責務を全うし、家族の待つ家に無事戻ったサムの帰還をも含意しているのではあるまいか。

(Received:December 31,2010)

(Issued in internet Edition:February 8,2011)